高度情報通信ネットワーク社会における教師概念の類型論

―「教授空間」と「学習空間」との関係性をめぐる応用的考察―

佐々木英和

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第9号　別刷

2022年8月31日

高度情報通信ネットワーク社会における教師概念の類型論†
―「教授空間」と「学習空間」との関係性をめぐる応用的考察―

佐々木英和*
宇都宮大学地域創生推進機構*

インターネットなどの高度な情報通信技術が普及・定着した時代においては、教育方法や学習形態が多様化・多元化しているので、教育をめぐる各種概念を理解する際に根本的な発想転換が必要不可欠である。本稿では、「教える」という営みを行う「教師」を概念規定する際に、「教授空間」について「ステージ」と「スタジオ」との対比を有効活用する。さらに、「いま、ここ」を分析概念として活用することを基盤として「教授行為」を表現論的文脈から際立たせて理解することにより、「教室集合型」「現地研修型」「ライブ配信型」「置き手紙型」といった4つに類型化した授業概念に呼応する形で、「舞台俳優型」「添乗員型」「アナウンサー型」「映画俳優型」の4つの教師類型を導き出し、この枠組みを生かして具体的な教育実践を分析する。

キーワード：インターネット、教師、教授空間、ステージ、スタジオ、ハイブリッド型授業

はじめに

2020（令和2）年はじめから世界的に影響を与えているコロナ禍は、学校に通う児童・生徒・学生が教室に集って教師から一斉に教わるという教育形態を阻むものとなった。そして、その代替策として、「オンライン学習」という名で、双方向的な「ICT（=Information and Communication Technology）つまり情報通信技術を積極的に活用して実施する「遠隔教育（=distance education）」を導入しようとする動きが、世界的に広がった。

ただし、日本の教育政策において、学校教育に遠隔教育を導入しようとする動きは、必ずしもコロナ禍に応じた急ごしらえだったわけではなく、それ以前から既定路線として進めようとされており、皮肉な形で重要視されるようになったにすぎない。たとえば、2018（平成30）年9月に文部科学省から出された「遠隔教育の推進に向けた施策方針」では、“遠隔システムの積極的な活用が有効な教育活動”がどのようなものかが真剣に模索されていた。

筆者は、このような状況を見すえて、多角的に教育概念を検討し直す必要があると以前から考えており、授業概念について、「いま、ここ」という時空間論的視点を分析概念として活用して、原理的に考察して類型化を試みている[1)]。そして、本稿は、この原理的考察の続編に当たるが、高度情報通信ネットワーク社会においては教師概念の理解についても根本的な発想転換が必要であるという問題意識の元に、応用的な議論を発展させたものである。

1　遠隔教育における「教授空間」と「教師」

新しい出来事が生じると、目先のことに追われて、原理的に把握すべき諸々のポイントをいちいち追究しようとしなくなりがちである。まずは一呼吸置いて、教育の実際をめぐる基礎概念を再確認しておこう。それは、多くの教育関係者にとって、無自覚に囚われがちな固定観念からの解放も意味する。

(1)「教育空間」と「教授空間」との区別

学校教育関係者の間では案外と意識されていない

---

† Hidekazu SASAKI*: Pedagogical Typology of the Concepts of Teachers in an Advanced Information and Telecommunications Network Society: An Applicative Study on the Relationships between Instructional and Learning Space
Keywords: Internet, Teacher, Instructional Space, Stage, Studio, Hybrid Education
* Institute for Social Innovation and Cooperation, Utsunomiya University
（連絡先：sasakih@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

のだが、「教育すること」はそのまま「教えること」そのものを意味するのではない。つまり、「教育（＝education)」と「教授（＝teaching)」とを分けて考えなければならない。原理的にはもちろん、教育実践を進める上で、「教育」と「教授」とを混同してはならない[2)]。

当然、「教育空間（＝educational space)」と「教授空間（＝instructional space)」とを混同してはならない。後者は前者に包含される概念であり、結果的に一致することもあるが、原理的には厳密に区別すべきものである。教育者と学習者との関係は、教授空間では「教える－教わる」が軸となって構成されるのに対して、教育空間においては、そうした教授的要素は、極めて重要とはいえ、その部分を占めるにすぎない。

あらかじめ言えば、この区別を強く意識して初めて、昨今のオンライン学習や遠隔教育をめぐる混沌とした議論を整理しやすくなる。というのは、教師概念とは、教育空間と教授空間との概念的な境界線に位置し、そのバランスによって成り立つものだとみなせるからである。

(2)「教授空間」と「学習空間」との関係への着目

これまでの学校教育では、「教育空間」といえば、誰しも半ば無意識のうちに「教室（＝classroom)」を思い浮かべていただろう。実際、教室において、教師による教授行為が実行されていたのである。そして、教師の教授行為に統治される形で、児童・生徒・学生にとっての「学習空間（＝learning space)」が成立していたのである。

だが、遠隔教育技術を活用したオンライン授業では、そういった空間的な固定観念は完全に破壊されてしまう。コロナ禍においては、児童・生徒・学生の登校を禁じることもあったので、教室が「もぬけの殻」になり、実質的に教育空間としては成り立たなくなってしまった。

代わりに、児童・生徒・学生を起点にして構成される「学習空間」は、彼らの自宅をはじめとした別空間に存在することになり、「教室」に通わないままで終わることが基本となる。それは、好むと好まざるとによらず、教授空間からの「学習空間の自立」を意味する。これにより、遠隔教育においては、「教育すること」と「教えること」とを原理的に区別しなければならないことはもちろん、「教わること」と「学ぶことと」との本質的区別を想起しなければならないという当たり前のことが浮上する。当然、「教えること」と「教わること」との関係でのみ教育空間を把握することは、教育活動の実際を把握する視野を矮小化してしまう[3)]。

そもそも遠隔教育における「遠隔的たること(=remote)」とは、教師が教える場所と、学習者が実際に学ぶ場所とが離れているし、それゆえに両者が一致することがないという意味合いを包含している。いずれにせよ、教育的営みが近接的か遠隔的かはともかく、物理的な意味で、教授空間と学習空間とが一致せずズレを孕む事態が生じていることの意味を考えなければならない。それは、授業や教師などをはじめとした諸々の教育概念を、根本的に構築し直すことにつながる。

(3) 教授空間としての「ステージ」と「スタジオ」

筆者は、教師が教授行為を営む実際的な物理空間について、何らかの比喩を用いて表現してみたい。その際、「ステージ（＝ stage)」と「スタジオ（＝studio)」との対比が便利かつ有益である。

前者の「ステージ」という言葉には、“音楽を演奏したり、演劇、芝居、ショーなどを行なったりするための舞台”や、“講演、演説などをするためのホールの演壇”という意味がある[4)]。大学の大講義室などで見かけるような“教師が教える時に立つ、一段高くなった所”のことを“教壇”と呼ぶ[5)]。そこは、大学教師が壇上から学生達に教授行為を行う際の場所としての機能を果たしている点で、「ステージ」の喩えは的を射ているであろう。ステージに対する「フロア（＝floor)」は聴衆席である[6)]。授業で言えば、教師の講話を、同じ部屋にいる学生が聞いてくれている状況を思い浮かべてよいだろう。

後者の「スタジオ」という言葉には、“画家、彫刻家、写真家、デザイナーなどの仕事場”という意味があるほか、“映画の撮影がその中でできるように設備された部屋”とか、“レコードの録音や放送などの際に、その中で演技したり、演奏したりするようにつくられた部屋”及び“放送室”や“録音室”という意味がある[7)]。この定義に従えば、授業準備を行う仕事場を「スタジオ」と呼べるばかりでなく、教師自身が講義している様子を収録している教室に対しても、ZOOMなどのテレビ会議システムのソフトを用いてライブ配信している自室に対しても、「スタジオ」という呼び名がふさわしいと言っても差し支えない。スマートフォンを使っても、授業は

可能であるから、移動した所々で講話する人が増えれば、世界中の至る所に半ば無限に「授業スタジオ」が存在する状況が生まれてくる。

(4)「ステージ・ティーチャー」と「スタジオ・ティーチャー」

教師概念についても、教師が人前に出る際の教授空間の違いを強調して、「ステージ・ティーチャー」と「スタジオ・ティーチャー」といった対比をするのが有効である。前者は、教壇というステージに立って授業を行うタイプである。後者は、情報通信ネットワーク社会の発展に伴い、教室にいないときにすら、自宅などをはじめとして、その時点で自分の居る場所をスタジオ化して教授行為を行うタイプの教師である。

音楽業界では、スタジオにおけるレコーディングのための演奏を主な仕事とする演奏家のことを、「スタジオ・ミュージシャン」と呼ぶのが一般的であるのに対して、「ステージ・ミュージシャン」という言い方が用いられることはほとんどない。これは、「ミュージシャン（＝musician)」は、舞台から観客に向けて生演奏をするのが基本となったものであるから、ステージ上で行うことが当たり前すぎてかえって意識化しにくいからである。同様にして、「ティーチャー（＝teacher)」も、教壇に立って教授行為をしている人が主流だったので、わざわざ「ステージ・ティーチャー」という言葉を用意する必要が無かった。「教壇に立つ」とか「教壇を去る」という言い方が、教員・教師という職業の動きを意味することに象徴的であろう[8)]。

だが、教師概念を丁寧に分類しておくことは、情報化社会という時代の変わり目では極めて重要である。いったん教育的文脈から離れた例を持ち出すが、「電話」について言えば、「携帯電話」が一般化してから、それまで一般的だったものに対して「固定電話」という呼び方で区別せざるをえなくなった。固定電話に馴染みの薄い世代にとっては、「電話」という単語を見聞きした場合、持ち運びのできるスマートフォンなどを思い浮かべる人が大半であり、固定電話を連想する人の方が少数派になりつつある。同様に考えれば、オンライン型の遠隔教育が普及するにつれ、「ティーチャー」と言った場合、ステージ型の授業を行う教師よりも、スタジオ型の授業を行う教師のほうを思い浮かべる割合が増えていくことも十分に想像できよう。たとえば、「教鞭」とは、教師が授業の際に用いる鞭のことであり、「教鞭を執る」という言い方が、教師になって児童・生徒・学生を教えたり、教職に就いていたりすることを示す言葉である[9)]。それにもかかわらず、教師と鞭とを結びつけて考える人は今や極めて少数派になっている。以上のことを踏まえれば、「ステージ・ティーチャー」と「スタジオ・ティーチャー」との対比は、単なる言葉遊びではなく、近未来の教育用語の変遷状況を予測するのであれば強調してよい。

2 「教授空間」と「学習空間」との関係性の類型化

教授空間と学習空間との関係性について体系的に理解するためには、筆者がすでに提案している「教室集合型」「現地研修型」「ライブ配信型」「置き手紙型」の４類型論が役立つと思われる。これらは、授業概念について、時間論レベルで「集中している（＝いま）－拡散している（＝いつでも)」という対立を想定し、空間論レベルで「閉じている（＝ここで）－開いている（＝どこでも)」という対立を想定して構造化して得られた枠組みの中に位置づけられる[10)]。

一つ目の「教室集合型」は、「＜いま＞かつ＜ここ＞でなくてはならない」という授業形態である。二つ目の「現地研修型」は、「＜いつでも＞よいけれども、＜ここ＞でなくてはならない」という授業形態である。第三の「ライブ配信型」は、「＜どこでも＞よいけれども、＜いま＞でなくてはならない」という授業形態である。四つ目の「置き手紙型」は、学習者が受講するという意味において「＜いつ＞にも＜どこ＞にもこだわらなくてよい」という授業形態である。この分類を下敷きとして、「教える」という行為について、教授空間と学習空間との関係を根底から再点検してみる。なお、本稿の後々の論理展開の都合上、「①教室集合型」「②ライブ配信型」「③置き手紙型」「④現地研修型」の順で論じていくことにする。

(1) 近接的関係が生きる「教室集合型授業」

従来、児童・生徒・学生も、「教室」といった一つの場所に集まることが基本であり、比喩的な言い方をすれば、その集合体の輪の中心に教師が存在していた。これは、「教室集合型」として分類できる。

基本的に、教師と学習者とは、閉じた空間である「教室」に集い、互いに近い距離で遭遇して集中的な時間を過ごしている。広い教室はともかく、小さ

めの狭い教室は、互いに顔が見えて、互いの息づかいが感じられる空間と化す。教師と学習者とが物理的に近いということは、教授空間と学習空間が近接的であることを意味する。ステージとフロアとの距離も近く、時に教授空間と学習空間とが物理的にほぼ一致していると言える。この場合の「空間（＝space)」は、物理的・身体的近接性を担保した「場所（＝place)」として、教師と学習者との共有的性格を生み出す。

(2) 離散的関係を増殖させる「ライブ配信型授業」

学習者は、テレビ会議システムとしてのZOOMなどを活用すれば、たとえばスマートフォンを用いて、どこにいても、目的の授業を視聴することが可能である。教師の側から見れば、学習者がどこにいようが、リアルタイムで視聴してもらえるのであれば、「ライブ配信型」として分類される授業である。

この場合の教授空間と学習空間とは、離散的な関係にあるとみなせる。つまり、一つにまとまっていた教授空間が学習空間へと移行する段においては、学習者ごとに複数化して、ちりじりバラバラの状態に分かれていくということである。授業スタジオから発せられた視聴覚情報は、デジタル化された後にアナログ的に認識されたりしながら、あちこちに配られる。複数の学習者は、それぞれ別々の空間にいるのにもかかわらず、同じ情報を受け取り、ほぼ同じような体験をする。もちろん、受け手側の受信環境などによって、画像の解像度などの違いが出てきて、受け止めるレベルで若干の差が出てくるが、伝達した側としては同じ情報を発信しているにすぎない。見方を変えれば、授業情報が離散的に分配されることによってこそ、教師と個々の学習者が接続されるのである。

(3) 分離的関係を前提とする「置き手紙型授業」

一般に「オンデマンド」というと、「好きなときに、好きなだけ」というように、学習者側に選択の主導権が移っている点で個別最適で、肯定的な面が目立つ。だが、冷静に見れば、「いつでも、どこでも」接することができるコンテンツは、その簡便さゆえにかえって後回しにされがちで、「いつまで経っても」接してもらえない可能性を内包している。

筆者は、こういった実情を見すえて、「オンデマンド」で対応できる授業形態を、「置き手紙型」と呼んでいる。つまり、教師がウェブ上に置いた教材とは、突き放した表現をすれば、そのままでは読んでもらえる保証のない「置き手紙」の域を出ないというわけである。いずれにしても、教師が生み出す教授空間は、学習者が学習する物理空間とは交わることはない、つまり分離しているのである。さらに、教師による教授時間も、学習者による学習時間とずれていることを踏まえれば、時間論レベルと空間論レベルの双方において、教授行為と学習活動とが分離しているという本質が垣間見える。

むろん、教師としては、児童・生徒・学生のことを想像しながら授業教材を作成する。教師が学習者との分離された状態をつなごうとするのには、「想像力（＝imagination)」が必要となる[11)]。教師としては、文章教材であれ、聴覚教材であれ、視聴覚教材であれ、創意工夫をこらす際に、相手のことを十分に想像せざるをえなくなるのであり、それなしでは独りよがりの授業教材に陥りかねない。

(4) 間接的関係を保持する「現地研修型授業」

学習者として、学校の教室に留まっていては学べず、まさに「現地」に出向いて、自分なりに感じ取ってこそ十分に学び取れることがある。これも、学校教育における授業形態の一つであるが、筆者は、「教室集合型」に対する「現地研修型」という呼び名を与えている。遠足や修学旅行なども、学校教育課程の一部として重要な教育機会として位置付けられているが、これらを「現地研修」という言い方に代表させているというわけである。

こうした授業形態においては、学校教師が児童・生徒・学生を引率して目的地に行くとしても、教室で行うほどの積極的な教授行為を、教師が行うことは基本的にはない。行った場所の施設などから学ぶべきことを、学習者が自ら学び取ってもらうことがメインである。だが、このことが教授行為と全く無関係というわけではなく、教師が学習者の近くにいることで、教師は多かれ少なかれ教育的影響を与えていることがほとんどなので、教師がいちいち細かく注意しなくても、子ども達は自ずと節制した動きをするだろう。

ここでは、教師による直接的な「教授行為」が行われているとは言いがたいが、間接的な「教授作用」が機能しているとみなせる。よって、教師が半ば無自覚的に創り出している教授空間は、学習者にとっての学習空間とは間接的な関係を保持しているとみなせるのである。

3　教師概念の類型化

先に、「ステージ・ティーチャー」と「スタジオ・ティーチャー」という二項を対比する形で整理を行った。この対比を念頭に置きながら、「教室集合型」「ライブ配信型」「置き手紙型」「現場研修型」といった４類型を重ね合わせれば、現実の教師像や教師役割も描出可能になる。

その際、教育的文脈をいったん脇に置き、教師を「伝達者」もしくは「表現者」の一形態として捉え直すという発想転換を行う。現実の教師のどれくらいが自覚的かはともかく、教授行為が「表現（＝expression)」の一種であり、教師本人の意識はともかく、「教える」という行為を営むことが、どのような「現象」として把握できるかを解釈し直す。あらかじめ、授業形態の４類型にほぼ連動・呼応する形で教師像を提案すると、「舞台俳優型」「映画俳優型」「アナウンサー型」「添乗員型」の４種を提出できる。これについて、時間軸たる「いま－いつでも」と、空間軸たる「ここで－どこでも」とを掛け合わせて構造的に示して、あらかじめ諸要素を位置づけし直したものが、**図表1**である。この類型は、「教える」という職務が、決して無味乾燥な事務的な営みではないことを、まさに教師自身に思い起こさせるものとなろう。

図表１　高度情報通信ネットワーク社会における表現者的な教師像

時間水準	いつでも	**添乗員型**教師 ↑ **間接的**教授 ↑ 現地研修型授業 （いつでも、ここで）	**映画俳優型**教師 ↑ **分離的**教授 ↑ 置き手紙型授業 （いつでも、どこでも）
	いま	**舞台俳優型**教師 ↑ **近接的**教授 ↑ 教室集合型授業 （いま、ここで）	**アナウンサー型**教師 ↑ **離散的**教授 ↑ ライブ配信型授業 （いま、どこでも）
		ここで	どこでも
		空間水準	

(1)「舞台俳優型」の教師イメージ

一見して仰々しい言い方になるが、教室で授業を行う教師は、「舞台俳優（＝stage actor)」に喩えられる。教壇に立つ教師本人は、たいてい「演じている」という意識も自覚もないだろうが、外側から現象を捉えた言い方をすれば、「舞台俳優型」の教育コミュニケーションを行っている。

学習者との向き合い方に「いま、ここ」的な充実感を持たせている教師は、一回一回が真剣勝負の授業では、相手次第で、自分の教え方が変わることもあろう。それは、毎回同じ演技をしているように見える舞台俳優が、実は一回一回の質が微妙に異なった演技をしているようなものである。

もっぱら教壇で淡々と教科書を読み上げる教師ですら、あまり上手とは言えない朗読劇を行っているステージ・ティーチャーだとみなせる。また、ステージからフロアへ降りていくという形の授業も可能であり、あたかもホストがディナーショーでゲストに挨拶するように動き回ることも可能である。

(2)「アナウンサー型」の教師イメージ

いきなり突飛な発想のようだが、教師が放送部の部員になって、学校の放送室を活用して、授業を行っている姿をイメージしてみよう。その姿は、テレビやラジオ放送などで、ニュースを報じたり、番組の司会をしたり、実況を伝えたりする「アナウンサー（＝announcer)」といった職業に喩えられる。ライブ配信型授業は、各地に点在する学習者に対して、アナウンサーが生放送で発信しているようなものである。

アナウンサーと言えば、一般に「お堅い」というイメージが湧きやすいのかもしれないが、教師の語り口次第では、個性豊かな「語り手」となるであろう。また、ラジオ番組で、会話の合間に音楽を流したりする時間を持つような「ディスク・ジョッキー」のようなイメージの合うスタジオ・ティーチャーもいるだろう。

ここで、インターネットを用いていれば、学習者との双方向のやり取りができるので、発信者が一方的に語るだけでなく、視聴者たる学習者からの質問や意見を教師が受け付けて回答することも、「生放送」だからこそ実行可能である。ZOOMの「ブレイクアウト・セッション」機能を用いれば、学習者どうしの交流を生み出すこともできる。

これまでは教室に集まっていなければできなかった授業を、始めたいと思った各々の場所で立ち上げることになる。「いま、どこでも」的な授業は、各地で同時多発的にイベントを起こすようなものである。

(3)「映画俳優型」の教師イメージ

教師が学習者と「いつでも、どこでも」の形で向き合う方法は、色々ある。伝統的な通信教育で添削をするのも、その一例である。レジュメを作って、アップロードしたものをダウンロードしてもらう形で学習者に届くようにするのであれば、それは、「いつでも、どこでも」学習することを可能にする教材を教師が与えていることになる。

こうしたオンデマンド授業は、学習者の都合で行う、実質的には教師不在の授業である。「教材」ではあっても「教師」ではない。これをもって、「教師が授業を行っている」と主張するのには、無理があるだろう。というのは、教師は準備しただけで、準備した教材を活用して学習者と時間的に伴走する行為ができないからである。だがだからといって、そのことで「教師としての仕事」を成し遂げていないというわけではない。むしろ、諸々の手間などを考えれば、教師は十分すぎるほど働いている。

目の前に児童・生徒・学生がいなかったり、ライブ配信するのでなかったりするのであれば、それに関する表現活動は、理論上は何回でもやり直せる。実際には膨大な手間がかかるにしろ、自分の納得のいく「作品」にできるまで、何回も作り直して、「完成品」とした授業を展開できる。教師本人が登場しなければならない場合は、「映画俳優（＝movie actor)」の比喩が包括的で便利である。たとえ座って話していても、テレビカメラに向かって話をしている限りは、映画俳優に喩えられる。

たとえば放送大学の収録では、ディレクターがいて、映像や音声の専門スタッフがつき、アドバイスが入るし、専門のスタジオが用意される点で、映画の喩えはわかりやすいだろう。だが、自宅や研究室を用いたスタジオ・ティーチャーも、「自撮り」で作品を作らなければならない点では、その本質は全く変わらない。いわゆる「YouTuber」などとして、授業を行っていく類いのスタジオ･ティーチャーは、高度情報通信ネットワーク社会では、いっそう増えていくと推測される。

映像型のスタジオ講師は、視聴者とは隔離した時間と空間に生きており、「ビデオ・レター」を学習者に向けて作成しているようなものである。また、授業内容を音声データとして収録して提供する講師は、「ボイス・レター」を作成しているとみなせる。

何回も視聴されるのに堪える魅力的な「置き手紙」を作成しようとして、教材の中でも、自らが授業している音声や視聴覚情報を記録するのであれば、事前に教師らしく教える仕事を行っていることになる。なお､音声のみにより授業の収録を行う人は｢ラジオドラマ声優」とみなせるが、それを映画俳優型教師の一形態と位置づけてよい。

(4)「添乗員型」の教師イメージ

どこに行くのであれ、行った場所の教育的効果に期待するのが、現地学習である。児童・生徒・学生について、現地集合であれ、現地まで学校教師が引率するのであれ、メインとなる教材は「現地」であるため、教授行為は間接的なままである。

筆者は、こうしたタイプの教師役割について、「添乗員型」という呼び名を与えたい。「添乗員」と同義の「ツアー・コンダクター（＝tour conductor)」は、団体旅行などで、その団体の世話をするために付き添いをする人達であるが、このタイプの教師役割は、寄り添い見守ることである。

ツアー・コンダクターの役割は、ツアー客と旅程をともにするにとどまらない。観光地に行けば、その現地に詳しい人から説明を受けられるように事前に段取りを付けておくなど、様々な面でアレンジしておかなければならない。語学研修の付き添いで海外に赴き、「添乗員型教師」として活動する際には、現地講師に引き継ぐなど、学習者が効果的・効率的に学べるよう、お膳立てをしっかりしなければならない。教師自身が表に立って教えることが少なくても、まさに裏方として、活動しなければならないことは多々あるだろう。

4　授業形態の組み合わせの意義と限界

ここまで、高度情報通信ネットワーク社会において想定できる教師像について、「舞台俳優型」「アナウンサー型」「映画俳優型」「添乗員型」というように類型化してきた。だが、実際の学校教師が、一人四役を担わなければならないこともある。すると、「舞台俳優的」「アナウンサー的」「映画俳優的」「添乗員的」といった4つの特性を持った職業として教師役割を再規定せざるをえなくなる。こうした多面性を、一人の人間が持つのには、相当に、時に超人的に器用でなければならないだろう。

さらに、複雑なことに、こうした多元的側面を一つに絞らず、同時的に組み合わせることが要求されつつある。こうしたことは、単に頭の中で考えてい

るときとは違い、実行・実現するには困難だという事態に直面するであろう。

(1) 各種の授業形態を組み合わせようとする動き

ICTを用いた双方向的なコミュニケーションが可能な時代には、同じ授業について、学生の受講方法の選択肢が増えたが、それらを組み合わせることができる。「異なった要素が組み合わさったもの」というような意味合いを持つ“blend”や“hybrid”がカタカナ英語として定着しており、授業形態を示すものとして、「ブレンド型授業」や「ハイブリッド型授業」といった用語が急速に普及した[12)]。

さらには、「柔軟な」を意味する「フレキシブル(=flexible)」[13)]の上に「ハイブリッド」が組み合わさった造語として、「ハイフレックス」も登場した[14)]。つまり、教室で直に対面する授業を受けたい人、同じ時間帯にオンラインで授業を受けたい人、授業が録画されたものを後になって視聴したい人といった複数のニーズに柔軟に対応できるようにするというわけである。こうして、授業の受講形態について、学習者の選択肢が格段に増えることになる。

(2) 授業形態の混合の様相

筆者の用語で言えば、授業形態として、「教室集合型」「ライブ配信型」「置き手紙型」「現地研修型」の各自を組み合わせることになる。その組み合わせは、「時間的配列」と「空間的広がり」との両面から把握できる。

一方では、時間的配列としての組み合わせが考えられる。大人数の受講を想定して大講義室で行う15回の大学授業のカリキュラム構成を例に取って説明してみる。オリエンテーション回も含めた最初の3回は、受講人数が予測しづらいので、人が集まりすぎて、いわゆる「三密」が生じるのを避けるために、ZOOMを活用して授業をライブ配信する。出席できなかった人には、配信した授業の録画記録を期間限定で視聴できるように配慮し、置き手紙のような役割を果たさせる。それ以外の回は、基本的に教室に直に来てもらう形を取る。さらに、グループ分けなどを工夫して、受講生に授業内容に関わる「現場」を知ってもらうために、1回分を現地研修型の授業を行うという具合である。

他方では、学習者に対する空間論的配慮という角度から、授業形態の組み合わせが必要となることもある。教室で実施している授業を、教室に来ていない受講生に向けてライブ配信して、のぞいてもらう。さらに、それを録画したものを、受講生の都合のよいタイミングで視聴できるようにシステム化するという具合で、授業構成できる。

(3) 授業形態が混在する難しさと限界

授業を実施する際に、遠隔教育を活用するか否かといった二項対立ではなく、折衷的判断をすることは、理念としては望ましいかもしれないが、現実的には困難が伴う。教師の類型論が特性論へと転換しうるということは、一口に「教師」といっても、一人の人間で同時に複数の役割を果たすことは大変だという予告にもなっている。少なくとも三つのハードルを事前想定すべきである。

第一に、実務的には、準備の大変さが伴う。これについては、手間や時間をかけたり人手を増やしたりして、それに応じた条件整備を丁寧にできればであるが、状況は改善しうる。

第二に、授業のやり方が混在することは、より根本的で解決困難であり、学習者に目配りや気配りのできる教師ほど苦労するであろう。というのは、目の前の観客に対しては舞台俳優をやりながら、遠くの観客に対してはアナウンサーにもならなければならないし、さらに録画コンテンツも充実しなければならないのであれば、撮り直しのできない「本番」の続く映画俳優にもならなければならないからである。普段通り教室で行っている授業を同時中継しても、離れているところにいる学習者には十分な配慮が行き届いていないので、教師の神経を使う要素は圧倒的に増えている。

第三に、授業形態の違いは、学生の受講経験の違いになり、ひいては学習効果の格差につながりうる。同時中継で行うハイブリッド授業の根本的問題点は、同じ空間にいる人と別空間にいる人とでは、経験が全く異なってしまうことである。結果的に、各自の学習効果に大きな差が出るのは避けえない。たいていは、別空間にいる人は、教室の雰囲気などの情報が少ない分だけ不利である。同じ時間帯に別空間でも授業を受ける人のいるハイブリッド授業では、公平性の担保が深刻な問題と化す。

まとめにかえて

もともと学校教師は、学校生活において、学習者に「教える」以外にも、保護者対応や、各種の校務分掌や諸々の事務などといった雑用も含めて、様々な役割を抱えていた。高度情報通信ネットワーク社

会においては、教師としての内在的な役割も増えたので、教員の多忙化の問題はもちろん、今後の教員養成のあり方を考えるにしても、そういった面を等閑視し続けるわけにはいかないはずである。

－注・引用文献－

1）本稿の前提となる原理論は、以下で展開している。佐々木英和「高度情報通信化社会における授業概念の類型化の試み－『いま、ここ』概念を分析基点とした原理的考察 －」、宇都宮大学共同教育学部編『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』8号、2021年、281 ～ 289頁。

2）佐々木英和「『教える－学ぶ』関係についての理論的考察－『教える－教わる』関係から『生きる－学ぶ』関係へ－」、宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター編『宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要』第28号、2005年所収、341 ～ 350頁。

3）同上、342 ～ 343頁。

4）小学館国語辞典編集部編『精選版 日本国語大辞典 第二巻』（さ～の）、小学館、2006年、853頁。なお、「ステージ」には、“物事の段階”という意味もある（同上）。

5）山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之編『新明解 国語辞典 第八版』、2020年第一刷(1972年初版)、389頁。

6）元々は“床”を意味する“フロア”には、“講壇・ステージに対して”の“聴衆席”や“議場”という意味がある(松村明・三省堂編集所編『大辞林[第四 版]』、 三 省 堂、2019 年 [初 版 1988 年]、2437頁)。

7）小学館国語辞典編集部編、前掲辞書(第二巻)、847頁。

8）“教壇に立つ”とは、“教職につくこと”を意味する(小学館国語辞典編集部編『精選版 日本国語大辞典 第一巻』(あ～こ)、小学館、2006年、1478頁)。

9）“教鞭”とは、“教師が生徒を戒め教えるために使うむち”や“授業の時、教師が教授事項を指示するのに用いるむち”のことである(同上、1486頁)。“教鞭を執る”には“教師になって生徒を教える”とか“教職にある”という意味がある(同上)。

10）佐々木・前掲論文(2021年)では、諸々の具体例を入れ込む形で、授業類型を図表にして示している(同上、283頁)。

11）これに関連して、以下を参照のこと。佐々木英和「高度情報通信ネットワーク社会における『人間性』の在処と行方－『いま、ここ』概念を分析基点とした『出会い』についての一考察－」([特集] 改めて問う、人間性心理学のアイデンティティ　その過去、現在、未来)、日本人間性心理学会編『人間性心理学研究』第39巻第2 号、2022 年所収、103 ～ 113 頁。ここでは、“想像できる”を意味する“imaginable”と“想像上の”を意味する“imaginary”との違いが決定的に重要となる(同上、109 ～ 112頁)。

12）名詞の“blend”は、“混合物”と訳される（南出康世編集主幹『ジーニアス英和辞典 第5版』、大修館書店、2014年第1刷［2019年第6刷］、226頁）。名詞の“hybrid”は“（動・植物の）交配種、雑種”とか“混血児”や“混成物”と訳されたり、“他の機械の部品を使った機械”を意味したりする（同上、1052頁）。

13）“flexible”という形容詞には、“〈物が〉曲げやすい、しなやかな”に加えて、“融通のきく”や“すなおな”及び“順応性のある”、さらには“[人の]言いなりになる”という意味がある(同上、814頁)。

14）中島英博「新たな教育方法の導入と先導者の役割」、名古屋大学高等教育研究センター編『名古屋高等教育研究』第21 号、2021 年所収、90 頁。中島によれば、“ハイブリッドは、異なる授業参加方法を混合することを指し、具体的には学生の授業参加方法を対面とオンラインのどちらでも選べるようにすることを指す”ものであり、“フレキシブルは、異なる学習方法への参加を柔軟にすることを指す”ものである（同上）。その際、中島は、“同期のオンライン参加”と“非同期のオンライン参加”とでは、“学習経験が異なるが、どちらを選んでも同じ学習成果に到達できるよう、異なる学習方法を提供する必要がある”という認識を示している（同上）。

令和4年4月1日 受理

Pedagogical Typology of the Concepts of Teachers in an Advanced Information and Telecommunications Network Society: An Applicative Study on the Relationships between Instructional and Learning Space

Hidekazu SASAKI